

# 意味構造における場所理論の役割について

村 上 丘

On the Role of Localism  
in Semantic Structure

Takashi Murakami

0. はじめに
1. 場所理論について
2. Miller (1985) の概要
3. Miller (1985) の検討
4. 対称的述語の分析
5. 意味構造におけるダイナミックス
6. おわりに

## 0. は じ め に

本稿の目的は、場所理論の枠組で英語の文の意味構造を考察することにある。実際、意味構造の分析にこの場所理論を適用したのが Miller (1985) (以下Mと略記) である。本稿では、M論文の批判的な検討に基づき、意味構造における場所理論の妥当な位置づけを勘案し、その理論的拡張をはかる。第1節では、場所理論という概念について言及する。第2節では、Mの概要を述べる。第3節では、Mの論点を様々な角度から検討し、その問題点の解決案を提出する。第4節では、第3節で導いた結論を対称的述語を含む構文に適用し、言語事実に即した意味構造を提案する。第5節では、意味構造をダイナミックなものとして捕らえる仮説を提出する。第6節では、本稿の考察を要約し、残された問題、および、他の言語理論との関連について考察する。

## 1. 場所理論について

村上(1987)においては、流体の移動や様相の変化など、連続体 (continuum) の運動を表わす構文を対象に、場所理論と関係文法との統合をはかる暫定的な試みを行なった。その論考のなかで、多重結合 (multiattachment) という概念を導入し、名詞句が、関係網のなかで、文法項および場所格の2つの文法関係を担うとする主張をした。その場合、場所格設定に関しては、当該の他動詞構文が、①主語と同一指示的な余剰的代名詞を含む同義的な他動詞構文を有する、②場所格前置詞を含む同義的な自動詞構文を有する、という2つの条件のいずれかを満たす場合に限定した。換言すれば、統語的な証拠がある場合に限り、場所格の設定理由があるとしたのである。関係網が、当該の文の統語構造を明示したものである以上、文法上の動機づけの存在は、当然の要請である。

Lyons (1977, 718) によれば、場所理論とは、空間を表わす表現が、非空間を表わす表現に比べ、文法的小および意味的に、より基本的であるという仮説をいう。もしこの規定が正しければ、場所理論は、上記の議論の様な統語構造 (関係網) のレベルのみならず、意味構造のレベルにも適用

可能であることになる。すなわち、Mのように、場所理論を意味構造の領域に拡大して適用するのは、当然の理論的拡張といえる。<sup>(1)</sup>次の節では、生成意味論と比較しながら、意味構造のレベルで場所理論を駆使したMの枠組を確認する。

## 2. Miller (1985) の概要

### 2. 1. 生成意味論との比較

Mの目標は、①場所理論を擁護する、②意味構造には統語構造とはかなり異なる独自の範疇が必要であることを論証する、という2点である。この範疇とは、実際には、実在項 (entity) と、関係項 (relator) である。

意味構造が、2つの範疇から成り立つとするMの仮説は、生成意味論を思い起こさせるが、両者の間には次のような違いがある。①生成意味論においての意味構造は述語 (predicate) と項 (argument) から構成され (Lakoff, 1972), 述語は、いくつの項と共起するかによって、単項述語 (1-place predicate), 2項述語 (2-place predicate), 3項述語 (3-place predicate) などに分類される。一方、関係項は、2つの実在項を結びつける、いわば、2項述語の働きだけをする。②生成意味論における述語は、いわば、開いた集合を形成し、その成員の数はかなり多い。<sup>(2)</sup>一方、Mの関係項は、locative, ablative, allative の3つの成員だけから構成される閉じた集合である。③いわゆる動詞と名詞に当たるものは、生成意味論では、述語と項という別々の範疇に対応したが、これら2つの統語範疇は、Mの枠組みでは、ともども実在項に属する。<sup>(3)</sup>④生成意味論における前置詞は、意味構造のレベルで述語の役割を担うものと、意味構造のレベルで存在せず、派生の途中で、前置詞挿入規則により生じるものの2種類がある (村木・斉藤, 1978: 289)。一方、Mの枠組における前置詞は、方向性・所在をあらわす関係項に対応するものと、場所的位置を細分化した実在項に対応するものの2種類がある。前置詞に関する生成意味論とMとの区分は一致しない。⑤生成意味論では全く別々の扱いを受けていた前置詞、不変化詞、および副詞を、Mでは一様に実在項と見なす。この点に関しては、第3節で詳説する。

### 2. 2. 関係項と実在項

Mの意味構造は、関係項、およびそれによって結合された実在項から構成される。関係項には次の3種類がある。<sup>(4)</sup>

- (1) a. locative: 所有など、場所的な近接関係を表わす。
- b. allative: 目標点に向けての運動を表わす。
- c. ablative: あるものからの運動を表わす。

このような公理系を設定する背景には、①すべてのものは、他のものとの関係性において成り立つ、②関係性の存在は自明である、という前提がある。一方、実在項は、個別的な3次元の物体のみならず、場所も指し示すこともできる。

前置詞の意味分析に必要な実在項には次のようなものがある。

- (2) a. SUPERIOR: 物体の表面
- b. SUPSPACE: 物体の上部表面に隣接した空間
- c. INFERIOR: 物体の下部表面
- d. INFSPACE: 物体の下部表面と地面との間の空間
- e. ANTERIOR: 物体の前表面
- f. ANTSPACE: 物体の前表面に隣接した空間
- g. POSTERIOR: 物体の後ろ表面
- h. POSTSPACE: 物体の後ろ表面に隣接した空間



- i. LATUS：物体の側面
- j. LATSPACE：物体の側面に隣接した空間
- k. CIRCUMSPACE：物体の全表面に隣接した空間
- l. PROXSPACE：物体に近接した空間
- m. INTERIOR：物体の内部表面
- n. INTSPACE：物体の内部表面に隣接した空間
- o. EXTERIOR：物体の外部表面
- p. EXTSPACE：物体の外部表面に隣接した空間

### 2. 3. 意味構造の具体例

前置詞，不変化詞，および副詞という3つの異なる品詞を，Mは次の4つの理由から同一視する。  
 ①不変化詞はその形態において前置詞に類似する。②副詞のいくつかは，その形態において，前置詞と同一か，あるいは，前置詞を含有する。③前置詞，不変化詞，および副詞は，同一の動詞に対する共起制限の記述について関与的である。すなわち，(3)において，統語的に不完全な(3a)は，前置詞句，不変化詞，および副詞の追加により(3b-d)のように完結する。

- (3) a. Angela put the cat.  
 b. Angela put the cat in its basket.  
 c. Angela put the cat out.  
 d. Angela put the cat outside.

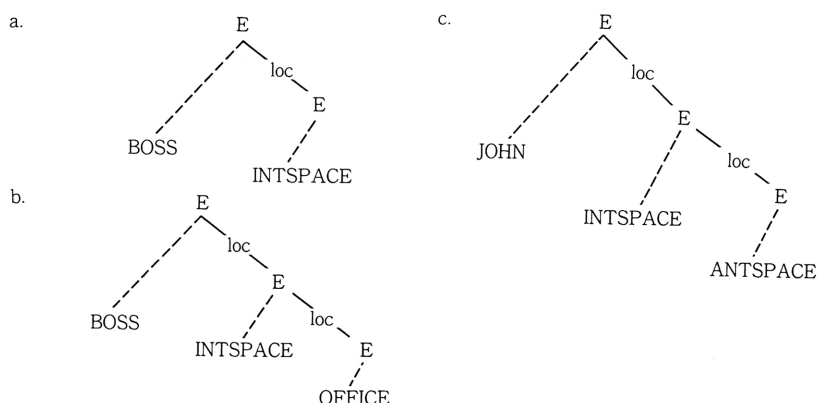
④前置詞句，不変化詞，および副詞は，主語名詞句と動詞との転換により，すべて，文頭の位置に來ることができる。

- (4) a. In the door lolloped a friendly ridgeback.  
 b. In lolloped a friendly ridgeback.  
 c. Inside lolloped a friendly ridgeback.

(2)に掲げた用語を用いると，(5)の各文の意味構造は，それぞれ，(6)のように提示することができる。

- (5) a. The boss is in.  
 b. The boss is in his office.  
 c. John is standing in front.

(6)



### 3. Miller (1985) の検討

#### 3. 1. Goldsmith (1986)

この節では、Mに対する Goldsmith の論評（以下Gと略記）を考察する。Gの論調は苛烈であるが、その論点のすべてにおいて、Mの欠陥を明白に論証することに成功しているわけでもないように思われる。

Mの欠陥としてGの指摘するもののなかから次の2つを考察しよう。①先行研究が顧みられておらず、新しい考えとして提案されているものが、実は、古いものであることの認識が欠けている。

②英語の意味論を厳密に考察していない。

第一の事例として、Gは次のように言う。前置詞、不変化詞、および副詞という3つの異なる品詞をMは同一視し、それを新奇な考えであるかのように主張するが、これは彼独自の創見ではなく、すでに、Jespersen (1924) によって提案されている。しかし、これは、先行研究を参照（もしくはそれに言及）しなかったという、いわば、議論のマナーの問題であり、Mに対する反証とはならない。第二の事例として、Gは get 受動構文に対するMの取り扱いを難じる。すなわち、場所理論の特徴として、たとえば(7)における get の用法のような微妙な意味的差異が無視されているという。

- (7) a. John got sick.  
 b. The food got John sick.  
 c. John got to go to the movies.  
 d. They got John to go to the movies.  
 e. John got inside.  
 f. John got arrested by the police.

Gの主張は、get の生ずる環境を網羅し、その記述に関する精度をもっと上げれば解決するかのようである。しかし、get は、実際には無限の文に起こりうる。get と統合関係になりうる語彙の可能性を総覧し、その意味的特性を記述するというGの願いは永遠に全うできないと思われる。

#### 3. 2. Salkie (1986)

前節のGの書評に比べ、Salkie(以下Sと略記)は、かなり好意的である。Sの唯一の懸念は、場所理論が心理的述語を処理しえないのではないかと、という点である。すなわち、実体を場所化する理論は、love, want, expect, believe, imagine, dissappoint, be aware, resent, regret などの述語に対し、love もしくは、impression などの精神的実体を設定しなければならないことになる。この考え方は、ある場合には比較的明瞭であるが (John is in love with Mary.など)、want, imagine, be aware などの場合には、それが疑わしいとSは言い、次の文を掲げる。

- (8) John wants to use the computer later.

この文において、話し手は John の精神的状態について述べているわけではないとSは言う。つまり、Sによれば、(8)によって陳述されているのは、「ジョンがコンピューターを使いたがっていると言っている」あるいは、「ジョンがコンピューターがいま使用可能か知っていたがっている」という出来事だという。そして、場所理論は万能ではなく、それが及ばない意味領域、換言すれば、独自の意味的範疇および意味的關係を有する世界（たとえば人間の心理）があると主張する。

しかし、Sは、その発話の力もしくは語用論の意味を読み込みすぎて、(8)を解釈しているように思われる。なぜなら、(8)の文を過去形にしたとき、その文は、ジョンの精神的状態を陳述するとして、何ら問題はないと考えられるからである。したがって、(8)の文も、発話の時点におけるジョンの精神的状態を陳述するとしてよいと思われる。さらに、Mは、心理的述語について述べていないわけではない。それどころか、心理的述語 (astonish) を含む構文の文体的変異形に対し、か

なりのスペースをその意味構造の呈示にさいている。ただし、この構文に対するMの分析については、いくつか賛同できない点があるので、次の節で詳細に検討しよう。

### 3. 3. 問題点とその解決案

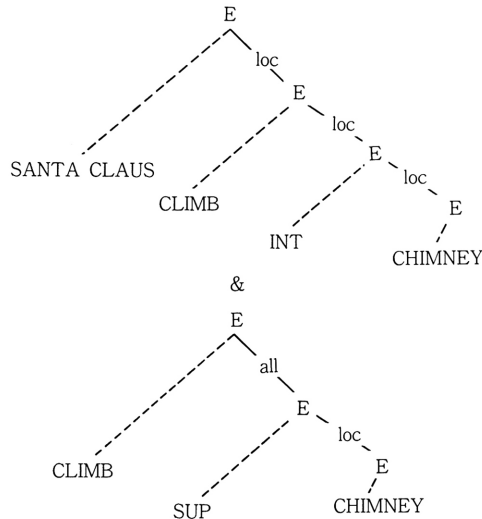
この節では、GとSの2つの書評では論じられていないMの問題点を指摘し、その解決法を探る。

#### 3. 3. 1.

Mは、(9)の文に、(10)のような意味構造を対応させる。

(9) Santa Clause is climbing up the chimney.

(10)



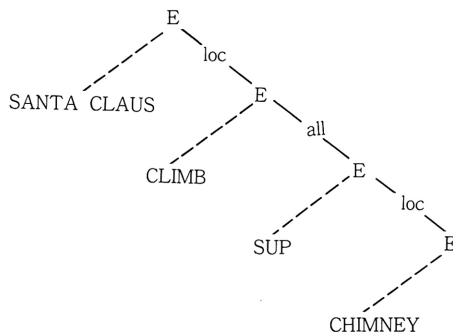
Mは、(9)に対応する意味構造が、①昇るという運動が煙突の内部で起こる、②運動の到達点が、煙突の頂上である、という2つの事実を説明しなければならない、と主張する。そのため、(10)のように2つの構造が接続要素で結合された意味構造を設定したのである。

ところで、上記①の事実、煙突がたまたま内部が空洞である物体であるが故に生じた解釈であると考えられる。下記の文のように、対象物が内部に侵入できない場合、昇るという運動はその外部で起こる。

(11) John climbed up the Matterhorn.

このことは、climb が、その運動経路に関しては無指定（あるいはあいまい (vague)）であり、可能な運動経路は、対象物の属性から推論するとすればよいことを意味すると思われる。すなわち、climb に関する運動が対象物の内部か外部かは、意味構造に記載する必要はない。結局、(9)の意味構造は(12)のように規定すればよいと思われる。

(12)



Mの意味構造(10)と比較し、(12)には余剰的な要素がなく、接続要素という、統語構造には全く現れない理論的構築物も存在しない。

### 3. 3. 2.

次の文を見てみよう。

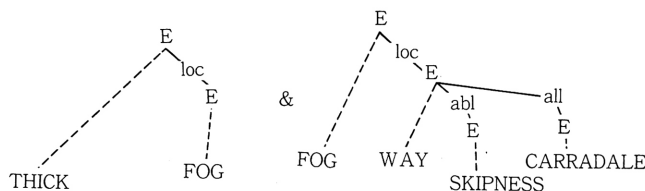
(13) From Skipness to Carradale the fog was thick.

Mは、次のように主張する。①The fog was thick. という文は、霧とある属性との近接関係として分析できる。その属性を実在項 THICK で表わす。②(13)の文における from-to は、物体の移動を含む状態を記述したものではない。その適切な意味構造は、次の文によってパラフレーズできる。

(14) On the way from Skipness to Carradale the fog was thick.

そこで、あらゆる種類の経路を表わす意味単位として実在項 WAY を設定する。このような考察に基づき、Mは次のような意味構造を提案する。

(15)



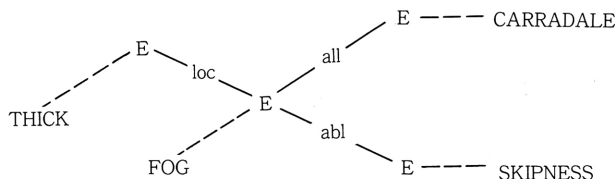
しかし、この分析には次のような問題点があると思われる。①二つのスキーマに含まれる fog の同一性を保証する方策が考えられていない。②実在項 way の設定が、その場かぎりのものである。実質的にその存在を支える証拠が欠如している。③WAY の存在は予測可能である。なぜなら、主動詞が状態動詞であるときのみ必要になるからである。換言すれば、実在項 WAY は余剰であることになり、意味構造には不要であると思われる。④もし状態動詞が起点と着点を表わす表現と共に起するとき、その意味構造が WAY を含むとすると、起点もしくは着点を表わす表現だけを従える状態動詞構文の意味構造をどう規定するのかという問題が生ずる。例えば(16)のような文の意味構造が WAY を含むとするのは直感に反するし、もし含まないとすれば WAY は、起点と着点を含む構造のみに現れるという制約を設けなければならない。

(16) a. The houses are back from the road.

b. The town lies to the north of Paris.

ここで(14)に対応する意味構造として次のような構造を提案する。

(17)



この分析の利点は次のとおりである。①意味構造規定のための一般原則として、接続要素が(単一節の文に関する限り)不要であると断定できる。②WAY を設定せずに意味構造を表示できる。(17)における FOG は不連続な個体ではなく、水や煙と同様<連続体>である (cf. 池上, 1981: 253)。ablative および allative の関係項を共通に支配する節点が、<連続体>を表わす実在項を携えていれば、全体として状態性を持つと規定することができるとと思われる。

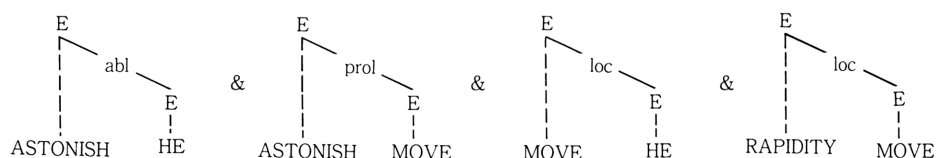
### 3. 3. 3.

Mは、著書の前半で、関係項は全てで3つあると主張しながら、後半、明確な理由もなく4つ目

の関係項 *prolative* を設定する。その例として、(18)に対応する意味構造(19)を提起する。

(18) He astonished us by his rapid movements.

(19)



この構造の問題点は、次のとおりである。①関係項*prolative* の根拠が明白でない。前置詞*by*によって具現していることから明確なように、これは通常の実在項と考えて、何の不都合もない。それどころか、この構造だけに、新しい関係項を設定することは、前置詞の処理に関し一貫性を欠く。②Mは、上記の意味構造のうち、第3と第4の構造を逆転させた構造が、(20)に対応すると主張する。

(20) He astonished us by the rapidity of his movements.

もしそうだとすると、統語構造の先行順序が意味構造の先行関係に対応することになる。しかし、一般に、線の配列は統語構造においてのみ有意義であり、意味構造に線状性を導入するのは適切ではないと考えられる。

上記の問題を打開するためには、次の3つの点を吟味する必要があると思われる。①実在項同志の関係ばかりでなく、命題同志の関係に目を配る必要がある。すなわち、(18, 20)は、[he astonished us], [he moved rapidly] という、2つの命題が、実在項 PROXSPACE によって連結されていると考えることができよう。(実在項 PROXSPACE は、様々な事物の近接関係を表わす。)②1つめの命題、即ち、[he astonished us] の内部構造を明らかにする必要がある。③2つめの命題、すなわち、[he moved rapidly] の内部構造を明らかにする必要がある。

第一の点は、命題全体を実在項としてとらえるべきか否かという問題に帰着する。<sup>(6)</sup>Mの意味構造の特徴は、構成素間の依存関係は示されるが、句構造規則というSにあたるものが存在していないことである。したがって、命題を他の命題に埋め込む手立てではなく、複数の命題が関与する文構造は、接続要素を導入することにより表示される。ところで、前節で、接続要素を意味構造に導入する方策に疑義を挟んだ。とすれば、接続要素およびS接点に相当するものを介さず、意味構造を表記する方法を考案しなければならなくなる。

第2の点に関して言えば、[he astonished us] という文を、Mのように [he astonished] と [astonished us] に分離する根拠が薄弱であると思われる。では、もし、[he astonished us] をそのまま2項述語として意味構造を表記しようとすればどうすれば良いだろうか。ここで、Mが、当該の文を次のようにパラフレーズしているのを思い起こそう。

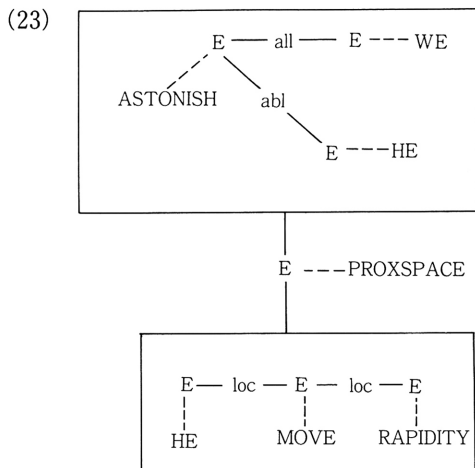
(21) Astonishment came from him to us by way of his rapid movements.

このように考えると、*allative* と *ablative* を導入し、表記すれば良いことになる。

第3の点に関して言えば、[he moved rapidly] という構造は、[he moved] と [rapidity] とが関係項 *locative* で結ばれた内部構造を持っていると考えられる。この2つに分断する傍証として(22)の各文をあげることができよう。

- (22) a. the rapidity of his movements  
 b. the rapidity with which he moved  
 c. His movements were (astonishingly) rapid.  
 d. He moved with (astonishing) rapidity.

すなわち、(22 a) の場合は、前置詞 of によって、(22 b) の場合は、前置詞 with および関係代名詞によって、(22 c) の場合は、連結詞 be によって、(22 d) の場合は、前置詞 with によって、それぞれ、構造上の切れ目が明示されている。これらの点を考慮し、(18)の文に対応する意味構造として以下のものを提案する。



ここで導入した新しい方策は、関係詞の連結対象を実在項から命題全体に拡張したことである。この結果、関係項には、1つの命題内部で実在項同志を結びつけるものと、実在項と命題あるいは命題同志を結びつけるものとの2種類があることになる。前者の関係項を、内在的关系項 (inner relator)、後者を外在的关系項 (outer relator) とよぶことにしよう。このような理論的拡張は、場所理論を前提する場合、当然生ずる帰結である。例えば、以下のような文は、いずれも、命題と時を表わす表現とが外在的关系項で連結された意味構造を有すると考えることができよう。

(24) a. On her death, her house was sold.

b. You should be careful in crossing the street.

四角で囲まれた領域（これを命題域と呼ぶことにしよう）は、関係項によって連結される対象としての命題を表わす。この命題域は、他の命題域内部に起こることもできると想定される。

#### 4. 対称的述語について

##### 4. 1. 意味表示

主語と、目的語あるいは前置詞の目的語の位置を交換しても、文の基本的意味が変化しない述語を対称的述語と呼ぶ。関係文法の枠組でこの述語を含む構文の統語構造を考察したものに、村上 (1982) 及び、それに対する反論としての高橋 (1984) がある。両者に共通しているのは、前置詞 to が間接目的語の標示形式であるという前提に基づき、対称的述語構文における前置詞の目的語の最終文法関係を間接目的語と見なしている点である。これまで、M論文の検討に基づき、意味構造の規定に関するいくつかの方策を提案した。この節では、それらを対称的述語を含む構文に適用し、その有効性を検証する。

はじめに、次の文を観察しよう。

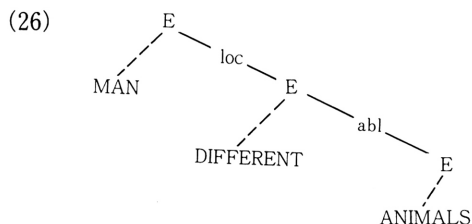
(25) a. Washington is far from Hanoi.

b. Man is different from animals in having the faculty of speech.

c. Passific Beach is adjacent to La Jolla.

d. Her hair was similar in color to mine.

上記の文において、(25 a, c) は、2 地点間の空間的な位置関係を表わす。一方、(25 b, d) は、2 つの物体の属性の相違を陳述したものであり、場所理論的には、抽象的な位置関係とみなすことができる。(25 a, b) の場合、前置詞 *from* が存在していることから、関係項 *ablative* がその意味構造に関与していると想定することができよう。それに対し、(25 c, d) においては、前置詞 *to* が現われているので、関係項 *allative* が介在すると想定することができる。また、*be* 動詞は *locative* の関係項に対応すると前提する。このように考えると、例えば、(25 b) に対応する意味構造の一部はつぎのように規定することができるだろう。<sup>(6)</sup>



同様に、前置詞として *to* を取る対称的述語 (*akin* など) を含む構文に対応する意味構造には *allative* が、前置詞として *with* を取る対称的述語 (*identical* など) を含む構文に対応する意味構造には *locative* が、それぞれ、関与することになる。関係文法の枠組で成された 2 つの先行研究は、いずれも、対称的述語構文における前置詞が間接目的語をマークするとしたが、他の前置詞に関し考慮が払われていない。<sup>(7)</sup> 一方、上記の意味構造は、少なくとも 3 種類の前置詞が対称的述語構文に具現するという記述的妥当性を満足する。

#### 4. 2. *in* 句について

対称的述語構文は、空間的表現を基本的とみなし、他を派生的とみなす場所理論に 1 つの示唆を与えられる。それは、*in* 句が、(27 a) のような、空間関係を表わす対称的述語構文には現れず、(27 b) のように、内在的に比較を表わす非空間的対称的述語構文にのみ現れるという言語事実による。

- (27) a. *far, close, distant, near, etc.*  
 b. *similar, different, identical, etc.*

このことは、対称的述語の本義が、空間において存立することを意味すると思われる。たとえば、並行・隣接・交差などの概念は 2 次元、あるいは、3 次元の空間において規定される。厳密に言えば、線分 *AB* と線分 *CD* との並行性は、それが存在する次元が規定されないと決定できない。我々は、通常、並行・隣接などの概念を、それが成立する次元を曖昧にして、使用しているわけである。すなわち、これらの概念を表わす日常言語としての対称的述語は、それらの成り立つ場所をも意味的に含意している。したがって、当該の事象がどの次元において成立するかを場所的に画定する必要はなく、それを表わす前置詞句も不要となる。

一方、類似・相違・同等などの概念は、それ自身空間的には規定できない。なぜなら、これらの概念は、物体の空間的位置ではなく、物体の属性間の関係を意味するからである。それが成り立つためには、2 つの事象にまたがる共通基盤が存在しなくてはならない。この基盤は、命題全体が存立する条件を規定するが、かならず意味構造に存在しなければならないわけではないと思われる。なぜなら、それらを表わす表現がなくとも、容認可能であるし、削除されたという意識なしにそれらは使用されるからである。<sup>(8)</sup> すなわち、非空間表現に関する対称的述語は、それが成立する基盤をあらわす表現を義務的には要求しない。この共通基盤とは、意味構造においては、外在的關係項で表わされると考えられる。外在的關係項が存在するか否かは、ひとえに、統語構造に対応物があるか否かによる。

ここで、次のような文を観察しよう。

- (28) ...he resembled him hardly at all, neither physically nor in courage and determination.

上記の文における physically のような副詞は、観点の従接詞 (viewpoint subjunct) と呼ばれる (Quirk et al., 1985:568)。観点の従接詞は、形容詞 (A) から接辞 -ly の付加によって派生され、from a A point of view とパラフレーズすることができる。(28) の文において、観点の従接詞 (physically) と in 句 (in courage and determination) は、先行する対称的述語構文 (he resembled him) に対して、同等の資格を有する。このことは、もし in 句を外在的関係項と認定するなら、観点の従接詞もそのように扱うことができる可能性を示唆するものと解釈できる。すなわち、対称的述語構文と共に起する観点の従接詞は、意味構造のレベルでは、単一の構成素ではなく、関係項と実在項から構成される複合物であると想定するのである。ここで、意味構造のレベルで単一の構成素にのみ単一の語彙が挿入されると仮定しよう。もし、この仮定が妥当だとすると、実在項と関係項から観点の従接詞が構成されるレベルと、その観点の従接詞が単一の意味単位を構成するレベルというように、2つのレベルを意味構造に設定しなければならないことを意味する。このことは、意味構造の根幹に関わる問題であるので、次の節でさらに検討しよう。

## 5. 意味構造におけるダイナミックス

### 5. 1. 仮説の提示

言語に関する経験的事実として次のようなものがある。①個別言語において、同一の概念を表わすのに、異なる統語範疇に属する語彙項目を使う場合がある。②同一の概念を表わすのに、異なる言語によって、異なる統語範疇に属する語彙項目を使う場合がある。これらの事実を言語理論のどのレベルにおいて記述するかというのは大きな問題であるが、仮に、それらは、言語の意味構造のレベルで記述されるものであると仮定しよう。そのような仮定に基づき、次のような作業仮説を設定する。①意味構造は、個別言語においては、既存の構造を揺るがし、新しい構造を生み出すプロセスを内包する。②意味構造は、個別言語、あるいは、汎言語的な統語範疇の多様性の原因を内包する。上記のような意味構造の力動性を説明するために、次の2つの特性を関係項に付与しよう。①関係項は関係概念の不確定性に規定される。②関係項は連結する実在項に対して編入される。(これらは、Mには全く言及されていない。) 5. 2. と 5. 3. では、この2点についてそれぞれ検討する。

### 5. 2. 関係概念の不確定性

前節で、対称的述語を含む構文の意味構造を考察した。ところで、対称的述語のなかには、次の例が示すように、前置詞として、to のみならず、from や with も従えるものもある。

- (29) a. Her house is opposite to mine.  
b. The sun is quite distant from the earth.  
c. This is perfectly accordant with his idea.

また、以下のように、異なる前置詞が、同一述語と共に起る現象もある。

- (30) a. I am quite equal to [with] her in brain.  
b. The railroad is parallel to [with] the road.  
c. My plan is different from [to (BE)] yours.

ここで、Mの議論の根幹とも言える2つの前提を思い起こそう。①全てのものは他との関係性から成り立つ。②関係性の存在は自明である。ここで言う関係性とは、固定した概念ではなく、不確定なものであり、話し手の心的態度など、種々の要因により、変動すると予期される。ところで、



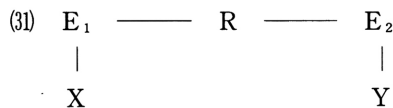
関係概念は連続的・暫時的なものであるのに対し、関係概念を表出する手段としての関係項は、有限個の前置詞として表われるという意味で非連続的なものである。このことは、当該の事象を表わすのに、唯一の前置詞が参画するのではないことを意味する。換言すれば、ある前置詞を用い当該の現象を記述する際、そこにおける前置詞が他の前置詞に変換することが予想される。

一般的傾向として、ある文構造における述語自身の意味が、対象物に対して指向性を持っているとき、それに対応する意味構造において関係項 allative が現れ、対象物に対して離反性を持っているときは、ablative が関与するとすることができよう。このことによって、similar などの対称的述語は前置詞 to を従え、dissident などの述語は from を従える説明が付く。しかし、対象物に対する指向性、あるいは離反性と言っても、そこに、実際測定可能な運動が検出されるわけではない。なぜなら、類似あるいは相違というのは、空間運動を伴わない抽象的精神現象の産物だからである。例えば、A と B との同一性・並行性という概念を、話し手が、A の B に対する近接と捕らえるか、A の B における共在として捕らえるかで、前置詞が to か with かの選択を受けるであろう。また、A と B との相違を、話し手が、A の B に対する対峙として捕らえるか離反として捕らえるかによって、前置詞も to か from かの選択を受けるであろう。このことが、例文(30)に2つの前置詞が現れうることを説明すると思われる。

ところで、相互に変換する可能性のある前置詞は、対称的述語に共起するものに限るわけではないし、変換に関わる条件も、もっと厳密に規定する必要がある。関係項の具現に関する研究が、今後の課題の1つとして残されている。

### 5. 3. 編入

X と Y が任意の実在項 (E) に対応する語彙項目、R が任意の関係項を表わすものとしよう。このとき、次のような意味構造が統語構造に写像される場合、理論的に、少なくとも4通りの可能性があると思われる。



第一の可能性は、 $E_1$ ,  $R$ ,  $E_2$  の3つの要素全てが、対応する語彙項目を有する場合である。しかし、意味構造に対応する言語記号が、統語構造のレベルで現れない場合もある。ここで、編入 (incorporation) という概念を導入しよう。編入は、関係項が、実在項と合体して、新たな意味構造を作り出すプロセスを言う。<sup>(9)</sup>すなわち、第二の可能性として、 $R$  が  $E_1$  に編入された場合、第三の可能性として、 $R$  が  $E_2$  に編入された場合を考えることができる。また、第四の可能性として、 $R$  が対応する言語記号を持たない場合が考えられる。このような  $R$  を潜在的関係項 (latent relator) と呼ぶことにしよう。もっとも、この場合、 $R$  は、意味的に中立的な locative に限られると思われる。<sup>(10)</sup> いずれにしても、語彙挿入の前の段階で編入という操作を導入することは、意味構造が、①実在項と関係項から構成されるレベル、②関係項が実在項に編入され、語彙項目が挿入されるレベル、の2つから構成されることを意味する。

前節で、観点の従接詞が実在項と関係項とから構成され、それらが1つに融合される可能性を示唆したが、これも、編入によるものと想定される。この節では、前節と同様、対称的述語と関わりのある構文の中から、編入の参与するとおぼしき事例を取り上げよう。

#### 5. 3. 1.

次のような資料を観察しよう。

- (32) a. the boy who is with the red hat  
b. the boy who has the red hat

Fillmore (1969, 373) および Langacker (1972, 184-86) は、(32 a) から (32 b) を派生する提案をした。しかし、ここでは、これら2つの構造は、意味構造のレベルで編入により、関係づけられるものとする。なぜなら、例えば、統語構造のレベルで変形規則により関係づけるとすると、それは、きわめて強力なものになるものと予想されるからである。上記の例に含まれる2つの名詞句は、ともに具体的なものであり、それらの間は近接という空間関係である。この構造と平行して、次のような非空間的表現が存在する。

- (32) a. the boy who is of a sound mind  
b. the boy who has a sound mind

このことから、前置詞の具現に関する規則を提示することができる。すなわち、関係項 (locative) は、空間関係を表わす場合、with として現われ、非空間関係を表わす場合、of として顕現する。対称的述語 like は、次のような文体的変異形をもつが、(34 b) における前置詞の現われ方は、上記の規則で、(34 c) における have は編入によって、それぞれ、説明することができると思われる。

- (34) a. Her lips are like a ruby.  
b. Her lips are of the likeness of a ruby.  
c. Her lips have the likeness of a ruby.

### 5. 3. 2

Kajita (1977) によって指摘された次のような構文を観察しよう。

- (35) a. The airport is far from the city.  
b. Those people are far from innocent.  
c. Those people are hardly innocent.

Kajita は、上記の構文が、次のような構造をもつと主張する。

- (36) a. [<sub>AP</sub> [<sub>Adj</sub> far] [<sub>PP</sub> from the city]]  
b. [<sub>AP</sub> [<sub>Adv</sub> far from] [<sub>Adj</sub> innocent]]  
c. [<sub>AP</sub> [<sub>Adv</sub> hardly] [<sub>Adj</sub> innocent]]

すなわち、(35 b) は、本来、(36 a) のような構造を持っているが、(36 c) の構造に基づき、(36 b) のように再解釈されるとするのである。この解釈規則は、次のような様々な対称的述語にも適用する。

- (37) a. He was close to fainting.  
b. It was next to impossible.  
c. It was near to being histeric.

Kajita は、派生の途中で、他の派生を参照する必要性を主張する。その場合、参照すべき他の派生とは、その構造だけではなく、その意味までも含む。これは、たとえ、表層構造で意味解釈を与えようと、深層構造で意味が決定されようと、Kajita の再解釈規則は、隣り合わない句構造に言及するきわめて強力なものであることを意味する。どのみち、意味に言及せざるをえないならば、統語構造のレベルではなく、意味構造のレベルで、当該の事象を検討する可能性も排除できないと思われる。

意味論的な観点から副詞を見た場合、almost, nearly, hardly, barely, など一群の副詞は、緩和語 (downtoner) と呼ばれる範疇に属し、ある規準 (assumed norm) を満たしていないことを表わす。これらは、さらに、almost, nearly などの概算を表わす近似語 (approximator) と、barely, hardly などの否定を内包する減度語 (minimizer) に下位区分される (cf. Quirk et. al., 1985 : 597)。緩和語が対称的述語にパラフレーズされるという事実を場所理論的に解釈すると、ある規準からの隔離の度合を、空間的な距離関係に還元することになる。すなわち、近似語を、close, near などのように

近接をあらわす空間的対称的述語に帰着させ、減度語を、far のように離反を表わす空間的対称的述語述語に帰着させることになる。一見周辺の用例であるかに見える (37) の各文は、はしなくも、場所理論的な観点からみた緩和語の意味構造をかいま見せていることになる。もし、緩和語に対するこのような接近法が正しいものであるとすると、次に要求されるのは、far という実在項と、from という関係項が意味的に融合し、hardly などの語彙項目が挿入されるレベルを生成するメカニズムである。ここで、緩和語は、空間表現としての対称的述語（実在項）と関係項が編入した派生意味構造に語彙挿入されると想定する。

easily/with ease, hastily/in haste など、様態の副詞 (manner adverbial) が前置詞を含む構造と関連があることは既に周知の事実である。はたして、場所理論のなかで副詞を扱うことが本当に妥当であるのか、もし妥当であるにしても、その分析は、様態の副詞・観点の従接詞・緩和語だけに限るのか、という課題が残されている。

## 6. お わ り に

Mは、意味構造が、統語構造と全く異なる構成を成すとする。すなわち、Mは、多項述語構文は、いくつかの単項述語構文に還元でき、その意味構造は、接統要素で単項述語構文を結合したものと見なす。しかし、もしそうだとすると、意味構造が過度に複雑になるうえ、統語構造に入力するための様々な方策が必要になるという不都合が生ずるため、その案は採用しなかった。

本稿では、意味構造が次のような条件を満たすものと想定した。①意味構造は、関係項と実在項の2つの理論的構築物から構成される。このレベルにおける要素は、語彙項目と1対1に対応せず、統語構造とは異なり、線的配列が有意義ではない。②関係項は、locative, ablative, allative の3つから構成され、それらはさらに、外在的关系項と内在的关系項とに2分される。前者は、実在項と命題、あるいは、命題と命題とを連結し、後者は、実在項同士を関係づける。関係項によって直接他の実在項あるいは命題と結びつけられる命題を命題域と呼ぶ。③関係項は、不確定な関係概念によって規定される。また、関係項は編入という過程をとうして他の実在項に融合される場合がある。これらの前提が、はたして、英語の他の構文を分析する場合にもあてはまるのか、英語以外の言語の場合はどうなのかを検証する必要がある。

次に、場所理論と前置詞の出没について触れておこう。前置詞の時間的な用法は、その空間的な用法の比喩的拡張と見なされる。その場合、前置詞が随意的に削除される現象が観察される (Quirk et al., 1985 : 688-693)。

(38) a. I'll see you (on) Monday.

b. We met (in) January last.

ところが、これと反対に、表面接触動詞構文の場合、具体的な用法の場合は前置詞が現われず、比喩的な用法の場合、前置詞が現われるという現象もある (Rhodes, 1977 : 512)。

(39) a. He hit on a marvelous idea.

b. He hit the table.

(40) a. He touched on the subject of slavery.

b. He touched the table.

空間的、および、非空間的な用法に関する前置詞の顕現に関する条件を規定することが、今後の課題となる。

最後に、場所理論と他の言語理論との関連について述べておこう。場所理論は、空間関係をあらわす表現形式を、他の表現形式に比べ、より基本的であると見なす。なぜ、空間関係が、記述の原点にたつかといえ、それが、最も、具体的であるからである。もっとも具体的な状況に基盤を置

き、他の言語事実の説明をする考え方に、プロトタイプ論がある。もっとも具体的な状況とは、場所と行動であり、これらを典型と考える。これらを、非典型的な精神的状態などに拡張することが考えられる (Rhodes, 1977: 509)。ただし、場所理論の場合、空間関係と非空間関係との間が、いわば、2項対立的・非連続的であるのに対し、プロトタイプ論の場合、それら2つの間は、連続的であり、その2つを分割する絶対的な境界線は引けないという違いが存在する。場所理論とプロトタイプ論との関連は、今後の問題である。

## 注

- (1) ただし、あるレベルにおいて得られた知見が、異なるレベルに転用されたとき、必ず有意義な結果をもたらすという保証はない。
- (2) もちろん、語彙分解などの方策は、述語の数を限定する試みではあるが、たとえそれが成功したとしても、自然言語の原始的述語の数はかなりの数にのぼると想定される。
- (3) もっとも、生成意味論において、名詞相当語句を述語から派生する方法も提案されており、それに従えば、生成意味論とMとの共通性があることになる。
- (4) Mは、その著書の後半で、第4の関係項として、prolataive(: 経由を表わす)を導入するが、その点については、第3節で検討する。
- (5) 句構造規則で言えば、NP→Sという反復規則を導入すべきか否かという問題に相当する。
- (6) in 句の意味構造における位置付けについては、4. 2. で述べる。
- (7) もし、from も with も間接目的語を表わすとすれば、格標示規則がきわめて複雑になることが予測される。
- (8) X is similar to Y.などの形式をとる格言・慣用句の意味の豊饒さは、まさしく、命題の存立する共通基盤を、意味構造に明示的に規定できない事実を裏付ける。
- (9) ここでは、編入が語彙前のレベルにおいてのみ適用すると考えている (cf. 影山 (1980))。編入が適用したあとの構造は、実在項同志が、関係項を介さず、直接連結される構造が派生されるが、その直後、意味的に最も中立的な関係項 locative が自動的に補填されると考える。
- (10) 例えば次のような対称的述語構文における述語と目的語は、その意味構造において、潜在的関係項 locative が関与していると考えることができよう。
  - (i) She resembles her mother.
  - (ii) Her character parallels yours.

## 参考文献

- Anderson, Stephen R. (1971) "On the role of deep structure in semantic interpretation," *Foundation of Language*. 7. 387-96.
- Fillmore, Charles J. (1969) "Toward a modern theory of case," in Reibel & Schane eds. (1969) *Modern Studies in English*. Prentice-Hall, Inc. New Jersey.
- Goldsmith, J. (1986) "Review article of Miller (1985)," *Journal of Linguistics*. 22. Number 2. 485-489.
- Kajita, Masaru (1977) "Toward a dynamic model of syntax," *SEL* 5. 44-76.
- Lakoff, Goerge. (1972) "Linguistics and natural logic," in Davidson & Harmaneds. (1972) *Semantics of Natural Language*. D. Reidel Publishing Company. Dordrecht, Holland.
- Langacker, Ronald W. (1972) *Fundamentals of Linguistic Analysis*. Harvourt Brace Jovanovich, Inc. New York.
- Lyons, John (1977) *Semantics*. 2. Cambridge University Press. Cambridge.
- Miller, J. (1985) *Semantics and Syntax*. Cambridge University Press. Cambridge.

- Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman. New York.  
 Rhodes, Richard (1977) "Semantics in a relational grammar," *CLS* 13. 503-514.  
 Salkie, Raphael (1986) "Review article of Miller (1985)," *Lingua*. 70. 57-10.

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館  
 影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』 松柏社  
 村上 丘 (1982) 「関係文法における対称的述語の処理について」『みゆうず』9号, (県立新潟女子短期大学英文科) 61-74.  
 村上 丘 (1987) 「場所理論と関係文法の統合へむけて」『群馬県立女子大学紀要』7号, 45-59.  
 村木正武・斉藤興雄 (1978) 『意味論』 研究社  
 高橋邦年 (1984) 「対称的述語の関係文法による分析」『信州大学教養部紀要 人文科学』18号, 47-62.